

帆を右に左に操つて、迂廻して舟を進める、種々面白い鳥がある、船頭は一々説明する、主人は一々スケッチする、二時間あまりで鹽竈の入江に着いた。

鹽竈ホテルといふのに僕を置いて、主人は鹽竈神社へ往つて三十分程で歸つて来た、丁度仙臺行の汽車が出るので直ぐに乗込む。

ホテルの亭主はドアの處へ来て『仙臺は何處へ御泊りです』と主人にきく、主人は極めて無いと言ふたら、それなら何卒仙臺ホテルにお泊り下さいといふ、やがて特別案内状といふのを持って来て、御名刺を戴きたいといふ、何にするといふたら、電話で申てやつてお迎をさせますといふ、大きな事になつたものだと思ふ。

やがて仙臺へ着いたら、果してホテルの印絆纏を着た男が待つてゐて、僕を連れてゆく。主人は躑躅ヶ岡と政岡の墓とを見にゆくといふので、車を走らせる、僕は表の西洋間に押上られた。八疊位の廣さだらう、外見は西洋間だか、中は疊が敷いてある。三方は窓で一方は床の間だ。電燈、電鈴、机も文房具も化粧道具も一切整つてゐる、ハイカラな座敷で大に氣に入つた、少し焦けのきた諧襟の、汗臭い夏服を着てゐる主人には過ぎものだ。主人は存外平氣なもんだ、靴下に穴があいてゐやうと、俺れは天下の美術家だといふやうな顔をしてゐる、窓際にアグラをかいて、停車場前を傘さしてゆきかふ人達をスケッチしてゐる。上野を出てから十一日目の夕刻、再び上野へ歸つた。途中でチ

ラと見た桑折邊の、緑の山の地はステキに佳い。忘れられない、いづれ近いうちに主人は出かける事だらう。

僕の無駄話も可なり長くなつた。いろ／＼お小言が出さうだから、此次はズット趣をかへて、僕が始めて主人の處へ来た時分、左様、今から十六七年前の、美術界の有様でも御話いたさう。

### 朝鮮の俚諺 (帝國文學)

△寝る處を見てから脚を伸せ。

自分の力を顧みて寫生の場處を選べ。

△一晚中哀哭して誰が死んだツたか知らぬ。

△終日慟哭して誰の夫人の葬式か知らん。

一日寫生しながら何を描いたのか自分でも分らぬ。

△一匹の馬背に鞍二つ置かれるか。

あつちの森も描きたい、こつちの家も入れたい。

△物事が少し判りかけたら老耄した。

少し繪のことが分つて來たらさして忙しい身上になつた。

△針鼠は自分の子供は柔で可愛らしいものと思つてる。

自分で畫いた繪はいつもお美ごとで

△京城を危い崖だと聞いてから果川からして這つてゆく。

樹木や草を畫くのはむづかしいものときいてからさつぱり

筆が進まぬ。

\*

\*

\*